



Title	例会特別企画：デザイン史研究と教育 4（ファッション編）：服飾史研究をめぐる諸問題
Author(s)	安城, 寿子
Citation	デザイン理論. 2026, 88, p. 90-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/106192
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

例会特別企画

デザイン史研究と教育 4 (ファッション編)

— 服飾史研究をめぐる諸問題

2026 年 2 月 7 日 (土)

対面開催：阪南大学あべのハルカスキャンパス

司会：安城寿子 (阪南大学)

ファッションの歴史をめぐる研究は、歴史学、哲学、文化人類学、家政学、社会学、経済学、経営学など、様々な領域の研究者によって試みられてきた。その歴史の多くの側面のうち、意匠を扱った研究に絞ってもそれは同様で、ファッションの歴史研究がそのようなものだという事実、そしてそれが内包する問題を看過して、初学者に向けて「服飾史」あるいは「ファッション史」の何を共有すべきかを論じることはできない。以上の問題意識から、今回は、例会特別企画として、3 名の研究者がそれぞれの専門に基づいて服飾史研究の諸問題について報告し、パネルディスカッションでは方法論と史料に関する問題を中心に意見交換を行った。

角田奈歩 (東洋大学)

安城寿子 (阪南大学)

筒井直子 (京都服飾文化研究財団 KCI)

なお、司会者は、「ファッション」という語を「流行現象と不可分に結び付いた服装もしくは服装周辺の事象のこと」という意味合いで用いているが、そもそもの問題として、「ファッション」の学術的定義が研究者間で共有されているわけではない。「ファッション」の語義が定まらない以上、「ファッション史」がいかなる範囲の学術研究を包含すると考えるかも個々の研究者の専門に左右されるところで、その輪郭は曖昧である。

【報告 1】角田奈歩「服飾の歴史を巡る学術研究の研究史と方法論」

服飾は長らく学術の対象として軽視され、研究も形態史に偏ってきた。「ファッション」概念も学術的定義が共有されていない。今回は未定義の語は避け、「服飾史」を主題とし、その研究史と方法論を概観する。主にヨーロッパを対象とする研究を扱う。

日本での服飾史研究は家政学が主な場となってきたが、家政学は対象学であり、実学的性格の強さもあって学術的内部結合が弱く、他領域との交流が乏しい。1990 年代以降、ポストモダニズムの影響で諸領域が衣や「ファッション」を扱い始めたが、家政学の服飾史研究はほぼ参照されなかった。家政学内でも方法論の模索やディシプリン化を目指す動きが起きたものの、領域分散による互いの不可視や学科

改組といった現実的事情もあって他領域との距離は一定以上に残る。

ヨーロッパでの服飾史研究はロマン主義期の演劇・祝祭の衣装考証に始まり、1875年出版の初の研究書の著者がフランス国立古文書学校校長 Quicherat であったように、学術的には歴史学から始まった。しかし数は少ない上、様式史偏重で衣服 clothing より衣装 costumes ばかりが扱われた。20世紀前半にアノール学派の影響で歴史学で扱える史料と対象が拡大した後、ポストモダン期には「衣服を着る人間」が研究されるようになる。2000年代以降は中心性の排除≡周縁性の否定が意識されてテーマはさらに広がり、過度な細分化の超克のための部分的統合も試みられているが、服飾史研究はいまだ豊富とは言えない。

社会科学では、経済学において布の生産・流通史は古くから研究されてきたものの、国民的産業、近代化を体現する産業としての研究が主流であり、特にかつての西洋経済史は「産業革命」の要因を大命題としそれ以降のみを対象としてきた。20世紀末以降は大航海時代以降が射程に入って消費革命論や半奢侈議論が生まれ、2010年代には「グローバル綿織物業史」が活況を呈した。女性の労働やモラル・エコノミーの観点からも服飾関係業が扱われるようになったが、依然として布偏重である。

近接する経営学・商学では、Nystrom 以来、百貨店企業史やアパレル産業史は確立され市場史・消費史としても服飾関連が扱われる。1990年代末以降のラグジュアリー産業研究ではアパレル産業もしばしば主題となるが、前近代は多く「前史」としての言及に留まる。

文化人類学では衣は一般的な研究対象だが、周縁的地域・民族・衣服に偏り、clothing より costumes が中心となりやすい。美術史では「描かれた衣服」は一般的に研究対象外で、デザイナー＝アーティスト研究が主流であり、20世紀以降に偏る。文学では「描かれた衣服」も研究され、衣の描写を人物像と結びつける研究も見られる。思想・哲学では Barthes『モードの体系』が画期となり、表象文化論も生まれたが、時代を遡るほど実証性を欠く傾向が強く、近年はポスト・ポストモダニズムへの移行にも懸念も残る。社会学・地域研究ではジェンダー研究進展と共に、性別ほか社会的立場と衣の関係が分析される。

このように服飾史は多領域で扱われるが、Repko の言うところの「学際研究」には多くの障害がある。課題設定、方法論、語彙の差、またその差を見過ごしてしまうことで単に顔を突き合わせるだけに終始する場合も多く、予算獲得、発表媒体、論文形式の違いも実務的障壁となる。しかし領域横断的交流には、方法論の相互援用、学術性の相互点検、研究者ネットワーク拡大など大きな意義がある。報告者自身、歴史学では「服飾史という異端」、家政学では「商業史という異端」、留学先では「商業史の一環としてたまたま服飾を扱っているだけ」と見られつつも、経済史・文化人類学・美術史・地域研究などの研究者と共同研究を行い、現在は経営学部に属するという経験から、学際性の実現には語彙レベルでの徹底的議論と、継続的・長期的な共同実践という泥臭い努力が不可欠と考える。

最後に課題と可能性をまとめる。課題としては、周縁性を言い訳や売りとするような甘えを捨て、各領域でテーマと無関係に評価される研究を目指すべきである。望めるなら他の研究者らにも、マイナー・テーマだからと安易に評価する風潮を改めていただきたい。優れた研究のためには方法論の各段階を自分なりに再考して応用性を高め、また実証性を徹底することが不可欠であり、これが他領域でも通用する学術性を担保する。そして可能性だが、服飾史は統合されないからこそ多様性が保たれている。部分的統合が他の排除を生む危険を考えれば、ディシプリン化志向はむしろ有害かも知れない。しかし分断がもたらす不可視・無視・軽視・蔑視といった姿勢の問題に加え、特に若手の成果発表機会・進学・就職の困難といった現実は深刻である。「あえて統合を目指さない」交流の場が重要だろうが、それがどこまで可能か、またアウトリーチをどう絡めるかも検討しなくてはならない。

【報告 2】安城寿子「服飾史記述のパリ中心主義批判をめぐる考察」

2025 年 2 月の第 256 回研究例会における「例会特別企画：デザイン史研究と教育 2」の中で、「ファッション史」の特性の一つとして、「パリ・モードの歴史として語られがちで、デザイナー列伝とともに流行の変遷を追うことに力点が置かれる傾向にある」との報告があった。服飾史叙述のパリ・モード中心主義はしばしば批判されるところだが、そのような問題がどこで起こっており、それが何故問題であるかはあらためて整理される必要がある。

カラー図版を多用した西洋服飾史の概説書は、パリ・コレクションに代表されるデザイナー列伝に偏りがちである。一方、美術館におけるファッション展では、パリで活躍したデザイナーの衣服が多く展示される。以上のように、私たちが「服飾」や「ファッション」と呼んでいるものの歴史が語られる際、パリ・モードをその中心として扱う傾向は確かに存在する。しかし、学術研究に目を向けると、そうした傾向はむしろ弱まりつつある。1990 年代後半から 2000 年代にかけて、ポストコロニアリズム批判の文脈で西洋／非西洋の非対称関係の再生産の問題が意識化される中で、パリ・モード中心主義史観を無批判に是認する研究は鳴りを潜めてきた。今や、そうした史観からは「周縁」に位置づけられるであろう地域を扱う研究、また、パリ・モードという「中心」の歴史的生成過程に批判的検討を加える研究は少なくない。さらに、別の局面として、日本のファッションデザイン教育では、デザイン上の基本的表現語彙を学ぶ目的から、著名な過去のデザインを時系列で紹介する講義が行われることがある。そうした講義の多くは、依然、パリ・モード中心になっているようだ。すなわち、そこでは、上述した学術研究の成果と教育実践が十分に接続されていない。もっとも、人文社会科学系の教養教育では、「ファッション文化史」等の講義科目で複数地域の相互影響関係が取り上げられることが多く、教育機関における語りも一様ではない。

ここで、あらためて、パリ・モード中心主義的な史観の何が問題かを確認しておこう。問題は、パリ・モードが歴史の主体であるという前提に立ち、他の地域をその影響を受ける受動的な存在として位置づけてしまう点にある。結果として、パリ・モードという「中心」に対する「周縁」の歴史は語られずに終わり、あたかもそこには能動的な流行が存在しないかのように表象されることになる。ポストコロニアリズム批判の文脈で繰り返し指摘されてきたのは、こうした周縁化の問題にほかならない。もう一つここで確認すべきは、歴史上のある時期、パリで生み出される服飾の流行が広範な影響力を持っていたという事実である。その証明としては、冷戦期のソ連ですらパリ・モードが参照されたことを示したラリッサ・ザハロワの研究を挙げれば十分だろう。あるいは、アメリカにおけるその受容と抵抗の歴史はヴァレリー・スティールや平芳裕子の研究に詳しい。パリ・モードがどのような過程を経て国際的影響力を獲得し、各地域で抵抗されつつも受容されたかを明らかにすることは、そのまま、パリ・モードを自明の「中心」とみなす史観の相対化につながる。以下は強調しておく必要があると思うが、パリ・モード中心主義的な史観を乗り越えるということは、決して、パリ・モードの歴史について語るのをやめたり、現に存在した影響力を否定したりすることを意味しない。

以上を踏まえて、近現代の日本服飾史を専門とする立場から 2 点指摘しておきたい。第一に、近現代の日本服飾史研究においては、洋装化にともなうパリ・モードの受容と抵抗について、なお検討の余地が大きく残されている。とりわけ、イメージ分析や言説分析ではなく、実際にパリから何がいっどのような形で輸入されたかというモノの流通の歴史は手付かずの部分が多い。加えて、洋装化の歴史については、社史や後年の回想などの二次文献に依拠する研究が少なくなく、同時代史料の検証が徹底されて

こなかったという問題がある。「泥臭い研究」が少ないと言い換えることもできよう。第二に、「服飾史」や「ファッション史」という大きな主語でパリ・モード中心主義を批判する言説それ自体が、非西洋地域を無意識のうちに周縁化していないだろうか。日本、韓国、台湾、中国、インドネシア、イラン、エジプト、南アフリカ等、各国の「服飾」や「ファッション」の歴史は、当該各地域の装いの文化や産業の形成を中心に語られることがほとんどで、パリ・モードの影響への言及はあっても、それが語りの核となる例はむしろ少ない。大きな主語でパリ・モード中心主義を批判する言説は、そうした非西洋地域についての研究の蓄積を予め視界の外に置いてしまっている。結果として、その批判自体が非西洋地域の周縁化を再生産するという逆説が生じるのである。

【報告 3】筒井直子「ファッションのアーカイブと展示の特殊性：京都服飾文化研究財団（KCI）の活動を通して」

1978 年設立の KCI は、ファッションを「ある時期、ある地域で広く人口に膾炙した流行の服飾」と捉え、西欧を起源とする 18 世紀以降のファッションを主軸に研究活動を続けてきた。そのため、民族服や舞台衣装等、この枠組みから外れるものとは峻別して作品収集を行っている。現在、収蔵品は服飾資料（衣服、装飾品、下着類）約 1 万 4 千点、図書資料約 2 万点を数える。

この KCI の活動は、従来の文化資料保存論では捉えきれない、ファッション特有の複合的な課題を浮き彫りにしている。

第一に、ファッションのアーカイブ化における「物質的・時間的な特殊性」がある。まず、ファッションは生成された瞬間から「流行遅れ」になる宿命を帯びるため、他の生活芸術品に比べ伝世し難い。ファッションは時代や社会の制度、材料、技術、嗜好を鋭敏に反映するメディアでありながら、実物として残り難いという本質的なパラドックスを抱えている。

第二に、アーカイブの範疇が動的に変容する点である。例えば 20 世紀以降の対象は服飾品本体に留まらず、ショー映像やルックブックなどのメディア資料もファッションを形成する重要なメディアとなっている。ファッションを取り巻く産業やメディアの変容に応じ、収集の範疇も更新されなければならない。

第三に、資料の「自律性」に関わる問題がある。絵画や彫刻などの美術品はモノ自体に自律的な価値が宿るが、ファッションの場合、個々の作品がいかに高度な技術で制作されていても「流行」という社会的文脈を欠いてはファッションとは認識されない。また、18、19 世紀の衣服の場合、制作年と近接した時期にサイズ直しや形態変更といった改変が繰り返される点に特殊性があり、「オリジナル」の時点を決めるのが難しい。この問題を極力解消するため、KCI では衣服の細部を熟覧して改変の痕跡などを詳細に記述し、作品ファイルとして残していくことで資料の真正性を担保している。

第四に、展示における「身体性と流行の再現」の不可欠性である。衣服は平置きやハンガー展示だけでは、当時のシルエットや雰囲気을 正確に伝えることはできない。つまり、ファッションとして提示できない。そのため、KCI は同時代の絵画、ファッション・プレート、写真等イメージ資料から時代考証し、付加すべき装身具を含め、歴史的に正確なコーディネート構築を重視して時代毎のファッションの再現を試みている。

さらに、展示の核心的な課題として「マネキンの制作」が挙げられる。20 世紀初頭以前の女性の衣服の多くは、コルセットで変形した着用者の身体を前提に仕立てられているため、KCI は所蔵衣服のサイズ平均値をもとに時代ごとのボディをマネキンメーカーと共同開発した。このボディ自体が、当時の流

行の体型規範を体現する。

このように、ファッションのアーカイブと展示は、流行という社会的文脈への依存性、実物の残存のし難さ、改変による真正の多層性、身体表現の不可欠性という特殊性と不可分といえる。ファッションという動的なメディアをいかに歴史化し継承していくかという KCI の実践は、今後の文化資源保存論やデザイン史の深化において向き合うべき本質的な問いを投げかけている。

【パネルディスカッション】

パネルディスカッションにおける主要な論点は、「テーマとディシプリン」、「服飾史研究の史料」、「相互排除の問題」の 3 点であった。

初学者には、しばしば、「服飾史」や「ファッション史」は一個の学問分野で固有の方法論を持つとの誤解が見られるが、「服飾史」も「ファッション史」も対象であり、それをいずれの領域の方法論に基づき分析・考察するかという問題でしかない。以上が誤解されたまま方法論の修得が疎かにされ、実証性を欠く研究が行われることへの危惧が共有された。

一方で、服飾には、絵画や彫刻などの美術作品に比べてモノが残りにくいという固有の問題が付きまとう。しばしば批判されるバリ・モード中心の服飾史叙述の問題もまた、こうした問題と不可分である。美術館で展示される衣服にせよ、ファッション雑誌に掲載される写真にせよ、意図に基づいて選別され、編集を加えられていることを踏まえた上で、衣の実情を同時代の生活実態とともに明らかにするためにいかなる史料が有効かを考える視点を忘れてはならない。

「相互排除」についてだが、「ファッションのような軽佻浮薄なものは学問研究の対象となりえない」という偏見は確かに長らく存在し、既存の学問領域から「服飾」や「ファッション」は排除されてきた。しかし、ポストモダニズム以降はそうした偏見が弱まる一方、近年ではまた別の形で排除が起こっているようにも見受けられる。歴史学や経済史での統計史料に依拠した実証研究を「ファッションらしくない研究」として排除するといった例がこれに該当する。

さらに、現存するブランドやデザイナーの研究に付きまとう困難にも言及された。とりわけ一般向け書籍や展覧会カタログの内容に企業側から「修正」要求が入ることはめずらしくない。この傾向はこと日本の企業に顕著で、ファッションデザインを含む表現は当然に自由な批評の対象たりうることへの理解の薄さが関係しているようである。

「服飾」や「ファッション」の歴史は様々な領域で研究が重ねられており、すでに蓄積も厚い。その一端を担う研究者として、意匠学会が「服飾」や「ファッション」の歴史をめぐる研究と真摯に向き合う場となっていくことを切に願う。